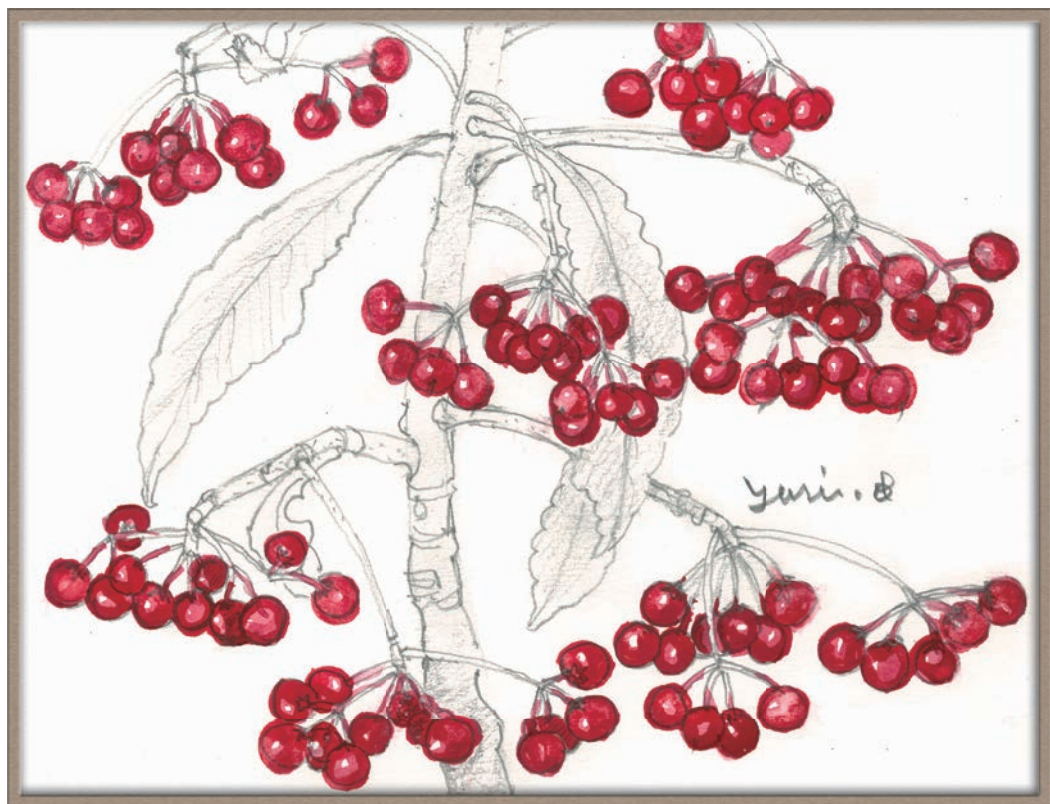


三河アララギ

平成三十年 2018年

新年号

第六十五卷 第一号



ニューヨーク日記(135) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

FRIDAY, OCTOBER 26, 2007

Blue Shoe Diaries



砂漠だよ～！ すごいすご～い！サラサラの砂！砂漠のキャンプに一泊したの。ワイン飲みながら夜空の下で寝たよ～ルミも一緒に来てくれたし。朝ちょっと顔砂っぱかったけど。日の出ころにはお散歩もして綺麗～
え～ ドバイだけあって砂漠なのに携帯の電波あるよ～ ShoeLadyメールのチェックしないでよ～ 私はラクダちゃん達ともう少し遊んでできます！皆さんもドバイに行くときは絶対に砂漠に行くべし！ 頭や心休まりますよ～

It's the desert! There's nothing but sand everywhere! It's pretty amazing, really. Rumi joined us too and we decided to stay overnight to camp out in the open air. It was so nice! We slept under the stars sipping some wine and catching up!! At sunrise we took a walk. So beautiful! This is how one ought to destress from everyday life in a big city! Definitely the highlight of our vacation!

And only in Dubai will your cellphone still work in the desert!! The desert trip is a must for everyone stopping by Dubai!

目次

第六十五卷第一号(通巻七六九号)

表紙・マンリョウ

今泉 由利(1)

『いよよせ』

いーはとぶ

ニューヨーク日記(135)

Blue Stone(2)

黄素馨の門

御津 磯夫(4)

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵(5)

歌集「續草々」

今泉 米子(6)

歌集「はゝきくち」Ⅱ

河原 静誠(7)

黄金色

岡本八千代(8)

自らに

今泉 由利(9)

ヌートリア

弓谷 久子(10)

雨台風

内藤 志げ(11)

晩秋の日差し

林 伊佐子(12)

小菊

安藤 和代(13)

薩摩芋

清澤 範子(14)

回り道

伊藤 忠男(15)

白玉星草

鈴木 孝雄(16)

酉の市

森岡 陽子(17)

新しき

阿部 淑子(18)

新玉の

足立 晴代(19)

次郎柿の原木

白井 信昭(20)

ひとり旅

杉浦恵美子(21)

花梨の香り

山口千恵子(22)

秋と冬の間

夏目 勝弘(23)

歌集「夢のつづき」

水上 信子(24)

私の一首

白井 信昭(25)

森岡 陽子(25)

現代学生百人一首

東洋大学

水野 光彩(28)

稲毛 萌乃(28)

櫻井 晴貴(28)

野口 莉子(28)

高橋 洋人(29)

桐ヶ窪眞子(29)

福田 理沙(29)

島崎 柊弥(29)

津之地直一(30)

鮫島 満(33)

高橋 育郎(34)

重野 善恵(36)

浜田 紀政(36)

吉見 幸子(26)

牧原 正枝(26)

石田 文子(26)

森 厚子(26)

山崎 俊子(26)

三田美奈子(27)

水野 絹子(27)

牧原 規恵(27)

稲吉 友江(27)

鈴木美耶子(27)

『江上浩二の独り言』

絹の話(86)

楽しい時間(62)

漢詩研修(十四)

『歴代天皇御製歌』(八十四)

土偶(2)

『氷魚』のことから(204)

みなさまへ⑤⑥

編集室だより(二〇一七年十一月)

野菜の花(19)

お知らせ・「三河アララギ」について

今泉 由利(36)

柳田 皓一(37)

松本 周二(37)

山迫 京子(37)

森岡 陽子(38)

植村 公女(38)

今泉 如雲(38)

二茶名句集

かさね吟行会

『酔いの徒然』(69)

ある自然科学者の手記(68)

大橋 望彦(44)

江上 浩二(45)

今泉 雅勝(46)

山本紀久雄(48)

平井 茂行(50)

貫名海屋資料館(52)

夏目 勝弘(54)

岡本八千代(55)

磯辺 耐(56)

三河アララギ(58)

鈴木 孝雄(59)

(60)

黄素馨の門（昭和四十一年〜昭和四十四年） 御 津 磯 夫

コンピュータ診断するとも一人一人の相異の分別は醫われがする

聖ルカ病院に誘はれたりし日のこともはるかになりぬ一生みじかし

いつの日か知るひとあれや朝々にひとりものを書きつづけゆく

天平の八幡の土の香をたつる白の黄の菊わが部屋ごとに

あらがはず枯れ伏しゆける土のうへ白くさかゆる茗荷の花は

竹にさす朝しばしなる日の光竹ことごとくぬれて立ちつつ

よみがたき「右みなと道」の道標の萱の中にてほろびちかづく

天平の女人菩薩のくちびるに用意よろしき光をささぐ

ときじくのものをもとめずつゆじもに立ちて傾くこんにやくの花

露に白きかたばみ踏みて光浴む一生のはてのしづこころなく

三河アララギ歌集Ⅲ

大須賀寿恵

歩みつつ硬くなりくるわが脚に芝生の露の撥ね返り来る

両の手を挙げゐる幼に祖母われは抱きとめやらむ手力はなし

幾度も咲きていくたびも実を結び季なきごとしたねつけ花は

日々通ふ道の竹藪竹の葉の夏の落葉の音の聞こゆる

萎えに馴れ痛みに馴れてゐるわれに今朝何故に悲しみの来る

若き葉のいまだほぐれぬ今年竹去年の竹を越えてなびける

心窩に汗つたひとつつ真昼間をさげゆく鰈が幾度も動く

また五六日思ひまどひてゐたりしが読まざる新聞ひとつ断る

なだらかに丸みおびたる雨畑の硯抱へて時雨の中帰る

しばらくを波すれすれにめぐりぬし鴨らは水に平に降りぬ

歌集 「續草々」

今 泉 米 子

撚絲工女の絲屑を今日も拾ひあげ診療時間終了となる

子規全集鷗外全集の書架の前ただ過ぎ去りしわが五十年

枝高く熟れて小梅の實が二つ琥珀のいろになりて見えつつ

今年竹今年も高く抜き出でてさはさは青し簞の上

草々の青の中よりおのづから南瓜の花の朝々のいろ

おくれつつ航空便の届きたりほてい葵の花立ちそろふ

大明竹の今年の細き秀の上にましろき雲のたてる朝風ぎ

笹竹としげりきたりて竹の秀のめぐるがごとくをりをりゆらぐ

ひらひらと竹の一葉に光あり立ちてそよがぬこの朝まだき

夏霽の中にゆららの大明竹かなしきことはひとりしおもふ

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

園児の手をかたくにぎりて今日もわが二級国道を横切りて行く

健やかになりし今年は園児らとお面をつけて豆まきしたり

夜をこめてまともあげたる一枚の保育資料をまたよみかへす

夜もすがらまとめあぐみし問題児の一年の記録をプリントにする

額田王のわたつみの歌くりかへしくりかへしおもふ今日の保育に

目高追ひてすぶぬれになりて来し園児吾が前にあり今朝の保育に

猿まねにひとしく踊る園児らに拍手をもとむる保母吾の声

幼らはブランコ毛虫とうたひいふ桃の小枝より垂りてうごめく

家庭訪問にわがめぐりゆく家毎に内職に剥くむき海老臭ふ

園児らと手をつなぎゆく畑道に撒かれて臭ふむき海老の殻

黄金色^{こがね}

蒲郡 岡本八千代

黄金色に黄葉^{もみぢ}せしわが庭萩の静かになびけり曾孫^{ひい}来る朝

ぽつぽつと雨の降りてはまた止みて庭萩黄金に雫光れり

平成はもうすぐ三十年夕暮れてそよぎあるかな黄金の庭萩

曾孫^{ひい}の男^をの子は三歳いつしかに女^めの子六歳になりしも来し方

曾孫^{ひい}来れば忽ち二階より燈^{あか}りのさして庭萩にまで

わが家のテレビにセットしてくれぬ鼓笛隊長のゆうみの姿

手に取りし「漱石雑記」は天金にて重々しきかなこの鈍^{にぶ}き光り

本の片包^{ひら}みし布は横縞の地味な布張り小宮豊隆の著

開きたる「漱石雑記」は豊隆の木屑録と七草集のこと

むらさきにいつまでか咲く野ボタンの花のいのちの長き今年よ

いつまでもわれを忘れずに電話来ぬ君は「きーちゃん」われは「八あちゃん」

自らに

東京 今泉 由利

宇宙間の遊泳してゐる心地して地球儀まはすマルタ島みゆ

おほひなる過去の続きの続きにて今日の私に真白茶の花

自らに由りて生きよと父母の名付けたまひし由利を生きをり

大根は水分地球に返し終ふ切干大根煮つけてゐたり

草陰に小さく居らるる地藏尊その微笑の内を離れず

ここかしこ木の実草の実散り敷きて土の上をばゆつくりとゆく

花びらの黄蘇きいよみがへる菊の花姿のままの天麩羅ですよ

近寄りてもつとも近くゐたる時「考えるひと」頼もしくあり

角材を薄くなしゆく光透くお釈迦様への光背づくり

掌に宝珠をそつと乗せたまひ私の地藏尊救済に入る

ヌートリア

豊川 弓 谷 久 子

チューリップの球根を子は植えてをり我は葉牡丹寄せ植えにせむ
御津川の鯉に混りて泳ぎゐるヌートリア見たり始めて見たり

何処より来て住みつきしか鯉の群れに茶色ヌートリア泳ぎてをりぬ
子の投げしパンを追ひかけ泳ぎゐるヌートリア一匹今日の発見

秋の色に染まり始めし御津山を眺めて歩む今日の小春日

家族運よければ万事よしとせむ十一月の我が星占い

好みの色は青とピンクと答えあり双子の姉妹にランチバック縫う

期せずして去年と同じ日となりぬ電気毛布にシーツを掛ける

口ずさむ歌は軍歌と古賀メロデー日向の縁に栗の皮むく

小春日和の一日暮れゆく何事も無ければそれでよしと思はむ

雨台風

豊川 内藤 志 げ

ほうれん草の畝間の水の引かぬ間に二十二号も雨台風と予報

ガラス窓に雨の粒々伝い落つ今この上を野分過ぐるか

時おりに篠つく雨を窓に見て炬燵に夫と葱の話しす

台風にトンネルのビニール切れぎれに泥にまみれて夫は引き寄す

朝の径ゆつくり歩む川添に並べる白き芒が光る

極早生の玉葱の苗を頂きぬ日曜の度雨早生玉葱は砂地特産

低き空赤石の峰をあお深く所々に煙か雲か清く見ゆる

台風の二十二号にほうれん草も葱もみな折れ出荷のなくて

高速道の側に太き山紅葉午後の日射に黄葉に紅葉に

午後の径コナラの径をカリカリと音たて歩む心はずます

晩秋の日差し

岡崎 林伊佐子

晩秋の日差しを浴びて豌豆の種まきをする借地畑に

白菜を藁わらに縛りて冬を越す畑に覆ふビニールトンネル

畑仕事を終へて帰宅を急ぐとき斜光二筋地上にとどく

ふる里も人の住まざる集落となりて帰省も稀となりたり

座右に置く茂吉氏の本わが師の本うたにつまれば導き給ふ

若き日に夫に賜はりし国語辞書表紙やぶれて歳月おもふ

電線に二羽のからすが今日もまた吾を待ちいる日の暮るる時

西空に夕陽が沈むひとときに白く棚引く飛行機雲が

すぎたれば時みな迅し怠慢に歌詠みてきし吾かと思ふ

小 菊

豊川 安 藤 和 代

吾病みて夫はショートへ行きました百舌の声さえ悲しく響く

夫婦とはひとつの屋根の下がいい小菊たわわに慰めくるる

病める身の互いを案ずる電話口変りないかと問いつ問われつ

病める身に吾見舞いくるる内藤さん初冬の風も暖しと思う

「顔色がいいネ」の医師のひと言に心晴ればれ小菊が香る

快くなればあれこれしたい事多し通院の道ひつじ田の道

吉祥と石巻山との中間に今宵満月しみじみとあり

点滴のその一粒に快復を祈りておればいつしか眠る

平熱になりたる朝の水旨し指先までもしみ通りゆく

軒下に大き螭螂秋色になりて動かず冬に入りゆく

薩摩芋

春日井 清澤 範子

小鳥の声に目覚めし今朝は晴ればれと庭の南天赤く色づく

秋雨はそぼ降りたるらし夜もすがら木犀の花わづかに散りぬ

寒気入り吾が故郷ふるさとの香嵐溪待月橋のにぎわふ写真

吾の手を引き握る娘の手暖かきかな氣持通いひぬ

狭窄症の手術してよりしびれるも吾に協力夫に感謝

菜園に工夫こらして薩摩芋大安の今日掘りて収穫

金時芋を収穫したり菜園に夫の作りし芋甘かりき

腰痛の体に無理のないやうに夫の暮しの思ひやりうれし

雑草は細かき砂利の中にあるラウンドアップまきて枯しぬ

山茶花の後に植えたる櫟の木に小粒の赤き甘き実のつく

回り道

大阪 伊藤 忠男

自転車を降りて登りし丘の道触れるススキに首をすくめる

コスモスが見頃と云われ遠回りまだまだ残る若き心が

あの紅葉見に行く坂と棘道わけいる勇氣まだ残りしや

人生も後期と云われ過ぐる日を振り返るでは余りに寂し

やつと終え腰掛けもたれひと呼吸安堵の色が浮ぶ朝方

我が子には厳しき苦言先に立つ孫との違いどこにあるのか

遊ぶ孫笑い声聞き我和む老けたか今も若きつもりが

物造り誇る日本に陰りあり嘘か騙しか誤魔化しなのか

階段を登る辛さにエレベーター探し歩くも息切れのもと

西陽受け浮き出る紅き阿弥陀仏ここが極楽浄土寺の秋

白玉星草

沼津 鈴木 孝雄

台風で落ちた松葉が広がりにて緑と茶色の織りなす絨毯

台風一過青空富士山青い海浜のゴミなくば日本一なり

台風に高潮加わり海岸は漂着ゴミが散らばり放題

兄弟の揃って母を訪問す分かってくれたか嬉しいと笑顔

文化の日日の丸挙げるは一軒のみ祭日尊ぶ気持ちはいずこ

白玉の星草ラジオで紹介さる葦毛湿原今や昔に

自衛隊の3機連帯飛行す皆不安げに空を見上げる

ネブカネギ土の皮剥ぐ白い肌瑞々しさに思わず唾き

タマネギの苗三百本植え付けて大きく育てと根本押さえる

寒風にさらされなお咲く紫のナスの処分をどうして出来よう

酉の市

東京 森岡陽子

先週は半袖を着て日傘さし今週上着に雨傘さして

眼裏に満月うつす雨今宵月なき空を見上ぐるのみに

ちよんちよんとちよんちよんと野鳥達森の公園木の実啄む

一葉落つ又一葉落つベンチ前友を待つ間に落葉増えゆく

高々と声あげ手うち酉の市熊手におかめ達磨が並ぶ

酉歳の酉の市での勝幟守しょうしゅまもり十二年後に再び求めむ

競馬場さくらもみぢは散り初むる馬頭観音足元色づく

黄昏に即かず離れず二羽の鴨くねり行く鴨水脈くねる

赤石と青石並ぶ築山に夕陽落ち行く清澄庭園

池の端午後の陽ななめ石路の花句会の涼亭灯りともりぬ

新しき

横浜 阿部 淑子

新しき年を迎えて我米寿ますます学びて悦びを得む

年賀状「どんと」手に載せどなたからめくりめくりて喜びに湧く

松南天めでたき花々活け込みてお屠蘇を祝う笑顔の家族

敬友の奥深き絵に魅せられて秋の美術展待ち遠しくも

デーサービス夫の足元安全に目ざすは通所六百回目よ

新玉の

東京 足立 晴代

年の瀬と齡^{よわい}重ねて今あるも夢の如くに過ぎ去りし日を

現代の暮らし異^{こと}なる若人の今後のあり方いかなるやら

九十を迎えて様々不具合の出でし体のこの頃なり

元旦の光り輝く朝日あび鳥はゝたき戌^{いぬ}年きたる

新玉の朝日昇りて空高く澄みたる心静かなるかな

次郎柿の原木

豊川 白井 信昭

軒下の紫に咲く野牡丹の季節を映す風情に和む

開通の早くと待たれし音羽川下橋五年目ようやく通れり

前家なるトタン一枚ま近にも昨夜よりの風にはがれつ

台風二つたて続けにてベランダの屋根の漆喰はがしゆきたり

川近く家に囲まれ一区画かの次郎柿の原木はありぬ

正面奥接木に拠る原木大^{たけ}二メートル余り意外と小さし

世界に一本しかないというこの一本系早生次郎柿は

遠海^{とうとうみ}の国一宮杜茂る小國^{おくに}神社のうつすら紅葉^{もみ}いだす

参道の入り口横に賑わえることまち横丁^{よめこみち}また夢小径

遠州灘青ひと色に広がりて砂丘の向こう風車群見ゆ

ひとり旅

蒲郡 杉浦恵美子

ひとり旅ノヴァラ駅前宿のカフェ初日の朝は未だ薄暗い

行くにしろ止めるにしてもひとり旅選ぶは全て我が身に掛かる

さて今日はトリノへ行くかパヴィアへか自由なほどに迷い続ける

切符一枚手にして疲れたこの先が思い遣られる旅の初日よ

迂闊にも入口見落とし塀伝い延々半周パヴィアの修道院

運転手忽ち表情引締まるミラノ市街にバスは入りたり

山積みのポルチーニ茸何処にて採れたのだろう市場の店棚

山間の小さな村の栗祭りそもそもそれが旅のきっかけ

焼き栗や栗粉菓子やらオリーブチーズ何れも素朴な山里の味

もう一度来たしと思へどマッラーディ遠いし祭りは年に一回

この村に二度と来れぬと思へばこそ祭りの露店をもう一巡り

花梨の香り

豊川 山口千恵子

繁りゐる杜鵑草何処より来しものか乱れ咲きゐる秋の日の中

天空に十三夜の月かがやけり弱々しき声の虫の音聞こゆ

とびたちし二羽の目白のすばやくて柿の小枝のしばらくゆるる

限られたるガラスの鉢の水の中目高泳げりただひたすらに

テーブルに二個の花梨の香りつつ何ごともなく日暮れてゆく

物置の小屋の屋根まで伸ぶる蔓引けば音して糸瓜落ちくる

収穫には未だ少し早きかなそれでも一本大根を抜く

南天の房実このごろ朱増せり鳥除けの網に囲ひてやらむ

日溜りの叢にムカデ潜み居て草取るわが指刺してすばやし

刻みたる一夜漬けのカブ白しその葉の青の彩りのよし

秋と冬の間

豊川 夏目勝弘

引込みの鉄路の跡はクス原の緑にポツンとてんてつき転轍機の立つ

クズの葉の緑のひろがるそこに黄花小さく憎きセンダン草

カクレミノも丸葉となりて繁りたつその木蔭に潜むモノなし

細さいのネムの細葉は台風に揉まれ緑の貧しくなりたり

叢に鳴きゐし虫の音いつしかに聞こえずなりぬ一日の終る

太陽と共に生きゐる今のわれ眠りにつくのも早くなりゆく

目覚めたる闇に思ふはスペインに攻め亡ぼされしインカ帝国

国を成さずおのおの各地で自然との共存せしは縄文人ぞ

なるべくは自然と共存してみよう今年の秋をまづは楽しむ

歌集 「夢のつづき」

水上 信子

標識に卑弥呼の里とう村を過ぐ大古墳に誰眠れるや

回廊を登りて夕日に向かい立つパゴダの影絵数限りなし

黄金に輝く尖塔空に向け祈り抱えてパゴダ林立す

広々と果てなき大地を埋め尽くすパゴダの彼方に赤き夕映え

朝な夕なただひたすらに祈れるは日々の平穏と現世の安寧

大戦に果てし兵士の幾百万ビルマの墓碑に香華を手向く

ホテルにて豎琴を弾く少女あり「ビルマの豎琴」知るや知らずや

この家に三十余年の暮らしあり取捨を左右に分くは切なく

思い出は足早に前を通りすぐアルバム五冊処分終えたり

古書店にて蔵書の処分を依頼しのち佐太郎歌集購いきたり

私の一首

空と海分かつところ水平線地球の丸み実感したり

白井信昭

潮見坂の眺望の利く道の駅は、遠州灘の雄大な眺めが見られる所。

遙か遠く沖の水平線が地球の丸みを実感させてくれる。

おだやかな小春日和の冬の入り愛犬達はシャンプーに行く

森岡陽子

犬の美容室の予約日、冬に入ったとは感じられぬ暖かく大変楽な日だった。

犬達は手入れに行くのが大好き。しかし、少し伸びた毛をカットした後、やはり冬、夕方から気温が下り出した途端寒いらしく、皆揃ってぶるぶる震え始めた。

『いっとうよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

わが庭にもノボタンの花咲き乱れその濃き紫夕陽に映えて
暮したる都の空に月光る高層ビルの明りの谷間に

吉見幸子

雨けぶる出雲大社の大鳥居この勢溜に友と屯す

質問を小学生等に受けたきに無視をされたりただそのままに

牧原正枝

刈られたる田んぼに青鷺一羽ゐる風冷やかな秋の夕ぐれ

大根の抜き菜もらひてみづみづし菜飯にせんかおひたしにせんか

石田文子

香り高く匂ひ立つ窓辺来てみればああ木犀の金の花々

手帳よりひらりと落ちしを拾ひたり今は透きとほる桜の幾ひら

森厚子

昨日とは違ふこの道たどり来て夕風の海にとぶよ銀の魚

夕暮に薄き一枚を羽織り足しポストへの道急ぎ足となり

山崎俊子

氷雨降るあの町角をトボトボと歩きゐたりきエスといふ犬は
鑄掛屋の鞆押ふいごす手と赤き火をしゃがみて見てゐき幼きわれは

三田美奈子

夜の来て「カオナシ」現るハロウインの仮装の親にやんやの喝采
孫曾孫長寿を祝ひて囲み居る母の笑顔の皺皺の顔

水野絹子

われの畑今日の雨風ようしやなく小さな緑らたたかれてをり
この町に嫁に来てよりいつしかに雑草畑の広ごりてをり

牧原規恵

九十年生き来し母の大きな手黒くてごつくてされど好きな手
福井より届きし新米今宵炊くジャーよりのぼる湯気まで愉し

稻吉友江

来てみれば先生の歌「宵待草」飾りてありたり出雲大社に

千住真理子のバイオリンの音聞こえる母と歌ひきあの「早春賦」が

鈴木美耶子

現代学生百人一首

東洋大学

帰省したその日のお昼に早速と父と仲良くポケモン捕獲

豊島岡女子学園中学校二年（東京都）

水野 光み彩さ

十八歳大人と子どもの境目で未来を決める切符を持った

東大和市第四中学校三年（東京都）

稲毛 萌もえ乃の

同い年リオの選手を見て思う四年後の自分に何ができるか

早稲田大学高等学院中学部三年（東京都）

櫻井 晴はる貴たか

浴衣着てマクドナルドに待ち合わせドア閉まるたび着くずれチエツク

学習院女子高等科一年（東京都）

野口 莉り子こ

「君の名は。」シネマ見終わり夜半の道ボリスに聞かれる「ねえ、君の名は？」

京華商業高等学校三年（東京都） 高橋 洋^{ひろ}人^と

車椅子義足で自在に駆けていくきらめく姿パラリンピック

聖徳学園高等学校二年（東京都） 桐ヶ窪^ま真^こ子

新学年名前呼ばれて返事した私の声はうぐいすみたい

星美学園高等学校二年（東京都） 福田 理^り沙^さ

グローブの網目から見る夏の空その隙間から見据える未来

専修大学附属高等学校一年（東京都） 島崎 柊^{しゅう}弥^や

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

采女^{うねめ}の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く

姦女乃 袖吹反 明日香風 京都乎遠見 無用爾布久(①五一、志貴人皇子)

(口訳) 都なら采女の美しい袖を吹きかえす明日香の風も、今は都が遠くなつてしまつたので、(袖を吹きかえすべく) 采女の姿もみられなくなつて) いたづらに吹いていることだ。

都が明日香宮から藤原宮に遷された後、なほ明日香の地にあつて志貴皇子の御作りになつた歌。志貴は旋基、芝基、志紀とも書き天智天皇の第七皇子である。第一句の「采女」は原文は「姦女」とある。孝徳紀の記事によれば、采女は諸国から郡の少領以上の身分のよい家柄からとり、しかも容貌も端正美麗な処女でなければならなかつた。宮中にあつては御膳の事その他に奉仕した。集中にはその出身地を冠した「駿河采女」(④五〇七、⑧一四二〇題詞)「吉備津采女」(②二一七題詞)「豊島^{としま}采女」(⑥一〇二六左注)「八上采女」(④五三五左注)等の例が見られる。「吹きかへす」については諸説あつて「吹きかへし」と過去の意にとつたり、「吹きかへすべき」としたり、又これは文字通り現前の景と見て「今吹きかへしている」の意と見るべきだとする人もある。これは口訳にも示した如く「都^{みやこ}なら吹きかえす明日香風」(明日香の地を吹く風)の本来の姿、本性を示した語として解釈したい。文明も「理を立てて言へばフキカヘシシとでも言ふ所かも知れないが、動詞の現在には、多趣多様に用ゐられ、かうした用法もあるのである。大意には誠に^{まことに}かへすべき」とした。その意もあると思ふ」と言つて居る。

引馬野にほふ^{はりば}榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに

引馬野爾 仁保布榛原 入乱 衣爾保波勢 多鼻能知師爾(①五七、長忌寸奥麻呂)

(口訳) 引馬野に美しく色づいている榛の木の下に入り乱れて(あなたは)その着ている着物を美しく染めなさいよ。
旅の記念として。

大宝二年、持統天皇の三河行幸の際の歌。歌の内容から奥麻呂は留守の人として、その行幸供奉の人に贈った作の如くである。引馬野は愛知県宝飯郡御津町字御馬の下佐脇附近と推定される。榛原を萩原とする説が広く行われているが、これはどこまでも「榛」(ハンの木)でその原と解すべきもので、「にほふ」は色美しく映発するの意で、ここでは榛の黄葉の美しさを言っている。第四句の「衣にほはせ」は一方でこの榛の木の実が摺染の料となるところから、その木をなつかしんで、その原に入り乱れると衣が美しく摺染されるかの如く趣向して詠まれたものである。卷十には「吾が背子が白畑衣行き触らばにほひぬべくも黄葉つ山かも」(二一九二)の歌もあつて参考になる。(三河アラギ第十卷二号「阿礼乃崎など」(3)参照)

いづくにか舟泊^{ふなはて}すらむ安礼の崎こぎたみ行きし棚無し小舟

何所爾可 船泊為良武 安礼乃崎 傍多味行之 棚無し小舟(①五八、高市黒人)

(口訳) 今晩は何処で舟泊りをしていることであろう。あの安礼の崎を漕ぎ廻つて行つて見えなくなつた舟棚も無い小さい舟は。

前歌と同じ時、高市黒人の詠んだ作。安礼乃崎は前歌の引馬野の南の崎、音羽川の川口に突出していた洲と推定される。これについても前歌に注した御津氏との対談「阿礼乃崎」を参照していただきたい。「棚無し小舟^{たななしをぶね}」は舟棚の無いような小さい舟というのを簡潔に四三調で言つた気持ちのよい語である。新撰字鏡には「舷」「棚」を「不奈太奈」と訓ませ、和名抄には「柵」をそう訓み「大船旁板也」と注している。船の左右の傍板の最下段を根柵^{ねだな}(または加敷^{かじき}とも)、その上を中柵^{なかだな}、その上を上柵^{うはだな}と言ひ、底板と根柵だけの小舟を棚無し小舟と言つたのである。第一、二句の主観句が以下の客観的な写生句と相俟つて、旅にある作者のものの寂しい感慨と郷愁をよく出している。文明はこの歌を海上航行中の歌と見て、阿礼の崎を三河西浦半島の御前岬かと比定して居られる。最近ここにこの歌の歌碑が建てられ、私の解説の碑もそのそばに小さく建てられている。

御津磯夫短歌鑑賞

1

「月虹」 鮫島 満

わが部屋に夕餉よろこびたまひつるみ齡はけふのわれに
おなじき

『ノボタンの窓』昭和三十八年

「憶茂吉先生」の題がある。作者は昭和三十八年に
誕生日を迎え、「わが部屋に夕餉よろこびたまひつる」
ときの斎藤茂吉は今の自分と同じ年齢だったのだと、
二十二年前のことを思い出しているのである。茂吉のそ
の時の日記（昭和十六年）を読むと、

十一月二十一日 金曜 雨

午前九時五十分蒲郡発、御油駅下車、三河宝飯郡御津
町御馬ノ今泉忠男氏（アララギ会員）ニ案内ネガヒ、
安礼崎（御津町下佐脇新田）、ソレカラ、国府町、御油
町ヲ経て宮路山ニノボリ、八幡二国分寺址ヲミ、鐘ヲミ、
夕餐御馳走ニナリ、六時二分発ニテ岐阜ニムカフ

とある。茂吉この日の旅の目的は、『万葉集』に詠まれた
いづくにか船泊すらむ安礼の崎こぎ回み行きし棚無
し小舟（巻一・58 高市黒人）

の「安礼の崎」を実地に見ることにあった。それは安礼
の崎が御津付近の岬であろうことを今泉忠男が早くから
発表していたからでもあった（なお、多くの事典は、こ
の説を説いたのは万葉学者の久松潜一であるとしてお
り、茂吉は今泉忠男がこの説を発表したとき、他の人に
差し抜かれないよう助言している。茂吉は『万葉秀歌』
に今泉の名前を久松の名とともに書き込んでいる）。

先の日記に茂吉は二十一日が雨だったことも記録して
いるが、磯夫は右の歌に続けて、

かの日にも時雨ふりゐて引馬野を草鞋ふますにした
がひゆきき

とも詠んでいる。時代が時代だからと言えはその通りだ
が、茂吉は滑ることを心配して草鞋を履いて時雨の中を
歩いたのである。

童謡

「樹木礼賛」 じゅもくらいさん

高橋育郎 作詞

わたしは樹木がすきだ

天をめざして高く大きく伸びて行く

その姿に わたしは畏敬の念を持ち多くを学ぶ

春 枝はうつすらと芽を吹いて

人に希望の喜びを与え

夏はたっぷりと葉を繁らせ

人はその下に憩う

秋には錦繡をまとい

人は感歎の声をあげる

やがて木枯しにうちふるえ

その衣は千切れて 中天に舞う

そして身を引き締め

冬の寒さに耐える

散り敷く落ち葉は地中に沈み
春に備えて養分とする

めぐる季節に順応し
年輪を重ね 生きて行く その智恵は偉大だ

地には深く根を張って
盤石の基礎を固める その力は偉大だ

自然の営みにさからわず あるがままに身をさらし
輪廻転生疑わず この大地に身をゆだね
何の驕りもへつらいもなく 平常心に生きて行く

なんとも悠然たるものではないか
わたしは樹木を仰ぎみて 礼賛する

平成5年10月27日

『俳句』

木枯しに足掬はれて蹠跟めけり

重野善恵

十三夜まだ鳴いているおくて晩生虫

落葉舞ふあぶちゃん赤き地藏さま

後の月一人占めする露天風呂

浜田紀政

地藏尊に使ひ古しの赤マフラ―

大風が四阿たたく櫟の実

お供して出雲にゆかむ神の旅

今泉由利

茶の花や秘めたる思ひ秘めたまま

上弦と下弦の真中神無月

木枯やけじめをつけに訪れり

柳 田 皓 一

この枝に今年は少し帰り花

帰りゆくいつもの道の帰り花

鰯飛んで河口に揺るる夕日かな

松 本 周 二

障子張る娘相手に呼吸^{いき}合へば

手水舎に雀の集う神の留守

石渡り水面に映る冬紅葉

山 迫 京 子

人波の上ゆくえびす大熊手

ルーフガーデンつつじの一つ帰り花

素通りの雨の車窓の冬紅葉

森岡陽子

小春日や雀さわがし昼下り

浮びくる暮行く園の石路の花

地球儀のわずかに揺る風の色

植村公女

極月や多磨霊園の空広し

ホットレモンゆつくり吹きて荷を下ろす

津軽から出雲は遠く神無月

今泉如雲

津軽にも外人墓地や冬入日

破蓮や北の静かな城下町

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

誰が願ひ星に一葉の吹ちるは

末の子や御墓参りの箒持

今日からは日本の雁ぞ楽に寝よ

遠山が目玉にうつる蜻蛉かな

どんぐりのねん／＼ころり／＼かな

甘さうな雪がふうはり／＼と

かさね吟行会

「清澄庭園」 十一月

田中清秀

日本を訪れる外国人は近年大幅に増え、今年は三千万人に迫る勢いと言う。特に日本庭園は自然を活かした伝統的な美しさに魅力を感じる人が多く、東京都内では新宿御苑や浜離宮、六義園の人気があるようだが、今回のかさね吟行会を行った清澄庭園もそのひとつで当日も多くの外国の観光客が訪れていた。

平成二十七年十一月十日、絶好の吟行日和となった。

松の青と色づいた紅葉が池面に写り鴨が静かに漂う景色は訪問客を魅了する。江戸時代には今より広い敷地だったらしいが現在でも池泉回遊式の庭園としての完成度は高い。特に正面から眺める涼亭はその優雅な建物と静かな池面との融合は冬晴れに映えて素晴らしい。

さざ波のゆらす入日や鴨の陣
離れ石つなぐ水面の枯もみじ
金黒羽白丸く水脈引く冬日かな

正規
清秀
素山

雪吊りは冬の風物詩で雪の多い東北や北陸地方に多く見られ代表的なものとして金沢の兼六園がある。毎年十一月に施され降雪期の終わる三月に外される。ここ清澄庭園でも冬の準備に雪吊りが施され更に優雅な景色を演出している。外国人には興味深い風習と写るだろう、まだ十一月初めなのに今年の冬の訪れは早い。

雪吊の逆さに映る鏡池

京子

雪吊の竹の角度を決めており

皓一

雪吊や脚立を畳み完了す

さち子

この歴史有る清澄庭園はもともと紀伊國屋文左衛門の屋敷跡と伝えられている。一代で築いた巨万の富を一代で使い果たした紀文大尽は紀州みかんを決死の覚悟で江戸に運び莫大な利益を得たという伝説の人物。吉原中の遊女を一夜買い切った豪遊でも知れているが意外に俳句への造詣が深いらしい。俳号は「千山」と言い其角や仙鶴、祇空などの当時有名な俳人と親交があり幾つかの俳書に入集している。祇空の後見のもとに息女の病氣平癒を祝って「百子鈴」を自ら編んだことも知られている。

また、今に残る俳句には「夏の夜や蚊につつかれて月を見る」「青葉からひと雫づつ大谷川」（日光市内にある紀文三句碑より）がある。上手下手は論じないが何か親しみを覚える一句である。

浮島の鷺はばたくや冬の暮

陽子

石路の花岩に温もり与えをり

礼子

初雪や八海山の昼の月

勝信

この清澄庭園では平成二十五年七月と平成二十八年一月にかさね吟行会を行っている。従って今回が三回目となるが決して飽きない新鮮さを我々に与えてくれる。開催月がずれていることもあるが木々の色、置かれた石や岩の輝き、水面に浮かぶ野禽、陽の高さや雲の動きなど四季折々の静かながめは微妙に変化し、その都度に感動を与える。都会の真ん中にありながらこのような景色を楽しむのは幸せである。

帰り花果実となれるゆとりなし

由利

公園の廁の明り冬ぬくし

周二

吟行の後は涼亭で句会を開催した、池に突き出るように建てられた数寄屋造りの建物はこの庭園を日本情緒豊かなものにしている。明治四十二年英国の国賓接待の為に岩崎家によって建てられ、東京都の歴史的建造物に選定されている。

句会は囁目三句四句選のいつもの形式で披露を行う。三年前に亡くなられた佐藤喜仙主宰がお氣に入りのこの涼亭で思ひ出話と俳句談義で盛り上がり、少し早いが忘年会を兼ねた打ち上げ会となった。

■かさね吟行会■

日時 一月十二日（金）

場所 大國魂神社

集合 京王線府中 十一時集合

伊勢丹側改札口

申込

森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（六九）

丸山 酔宵子

『秋の夜長とサウダーデイと』

暑い夏が過ぎ、日の出から日の入りまでの時間が一年を通じて一番短く、夜の時間が長くなる秋の夜長となってきた。暦の上では「立秋」が秋の始まりとされているが、8月の旧盆を過ぎたまだ暑い盛りでは秋とは感じられない。

「朝晩に涼しさを感じるころ」「夜に虫の音が大きく響くころ」「旬の食べ物が出始めるころ」「熱燗が欲しくなるころ」このような頃からが秋の始まりといつてよいのだらう。「秋の夜長」は12月の冬至まで続き、それを過ぎると夜が段々と短くなってくる。

俳句の秋の季語に「愁思」があるが、秋の寂しさに誘われる物思いが愁思（しゅうし）で、哀愁にも通じた人間の持つ孤独や無常を感じる。早いもので今年もあと2カ月余り。連日の鬱陶しい雨の毎日で、益々儂さを感じてしまふ。

寝静まった、やや肌寒い秋の夜更け、ウイスキーを飲みながらボーっとするのも捨てがたい。特に、夏にやれビールだ水割りだと疲れた内臓を労わるべく、ウイスキーのお湯割りが捨てがたい。そこにクロープ（丁子）を入れると、ウイスキーの香りと仄かな甘さが心地よい。耳元では、ブルーノートジャズのクロマティックハーモニカのウエスタン風の調べが、心の奥底に響き渡る。哀愁の音色と言えば、ポルトガルの民族歌謡ファドも捨てがたい。イタリア・カンツォーネ、フランス・シャンソン、アルゼンチン・タンゴ、ブラジル・サンバに並

ぶ民族歌謡である。大航海時代に果てしないロマンを求め海を渡っていく男を待ち思い続ける女の気持ちを切々と歌い続ける。

坂の多い石畳のリスボン旧市街にあるファド・レストランに行くと、洞窟の様な薄暗い中に蠟燭の光の下でファドの演奏が行われている。12弦のポルトガルギターに合わせ、肉感的なファド歌手がマイクなしの肉声で、声と体を震わせ、切々と歌うのである。

ポルトガルには都合数十回行っているが、何故か、スペインや他のヨーロッパの国々とは全く違う、何故か、沈んだ重苦しい雰囲気を感じる。

ファドとは運命、または宿命を意味し、サウダーデ（哀愁）を帯びたその調べはわが国の歌謡曲とも共通項を感じる。ポルトガルの国民的歌手のアマリア・ロドリゲスの「暗い船（はしけ）barco negro」をこんな夜更けに

聞いていると、重く深い太鼓の響きと低音の迫力ある歌
声が心に響き渡ってくる。

ファド太鼓グラスに響く秋夜長

酔宵子

ある自然科学者の手記 (68) 大橋 望彦

『大数観察』

最近、歳を取ることを考えることが多くなった。高齢社会の一人となったことは事実なのだが、高齢となると、皆同じように歳を取っているのにもかかわらず、その加齢の具合が大変違っていることに気が付く。これは昔、同じクラスであった友人たちが集まる同期会、クラス会といった会に出席すると、如実にこのことを実感することが多い。実際に、「老化現象を研究することは、個人差の度合いの違いについて研究することである」と、定義する人が居るくらいに、バラつきが大きくなることが知られている。それで、「歳相応に：。」という言葉が通用する年齢はどの位なのかを考えた。昔と違って、ずーっと高齢化しているようである。そう云えば、筆者も80歳を超えた途端にガクッと年老いた感じがするようになった。体調が崩れることが多くなり、めっきり物忘れも増え、老眼が進行するのも早まった。これ等はよく言う『老化した』という現象にびったりである。ところがそれは遅すぎて、70歳代でそうなるのが普通だそうである。「普通」というのは一般にそうなるのが常識的なことである。あ、常識というのは「大数観察」でよく観られる事なのだ。そうすると、先程の「老化した」というのは「大数観察」上でも一致する現象と言う事であればこれは本物なのであろう。どうやら一人前の老人になったのだと自覚する。結局、既に30年も以前に、東京都老人総合研究所の疫学部が調べた結果どうりとなつてしまったのに気が付いた。即ち、老化現象のバ

ラつきは、縦断的（年度別）と横断的（同年度毎）の「大数観察」（分母となる母集団が大多数である統計）に基づいた調査研究の結果では、バラつきが始まるのは35歳前後から次第に認められ、50〜60歳代を中心に大きくバラついている。然し、次第にそのバラつきも少なくなり、80歳代を過ぎると「大数観察」では殆んど老齡化していく。但し、中には極めてこの「大数観察」より外れた「長寿健康老人」が現れる。このような方が「百歳老人」、即ち、100歳以上も長寿な老人となれるのである。このような方は、年々増加の傾向が出てきているので、80歳代老齡化もその内、90歳代老齡化時代が来るのかもしれない。兎も角、筆者の時代ではないことだけは、自信がある。でも、未だにこのバラつきの原因に關しては明解な回答が出ていない。

扱、この「大数観察」について、もう一度考えてみると、どうも納得の出来ないことがある。それは先に触れた、クラス会なのであるが、暫くぶりに再会した際の印象として、人により歳の取り方が随分違うなあと云うことが率直に感じられ、正直驚くのであるが、それも、15〜20分も経たない内に、その印象は完全に消え去り、昔の友達に戻ってしまうのである。これは一体全体どうしたのであろうか。これから観ると、どうも「大数観察」は上っ面のことでしかなく、大して当てにはならない気もするのである。否、「大数観察」は常に変動するものであると、割り切って考えれば落ち着くのかも知れない。この結論は、先程の論法からすると、常識は、常に変動するものであると言いつ切っているようなものとなる。そういえば、筆者も「常識はずれ」だと言われたが、もう余り気にしなくてもいい気がしてきた。これは、「時代遅れ」にも通用するとすれば、これまた気が楽になれそうである。

「江上浩二の独り言」

江 上 浩 二

前年（注）に引き続き、今年、平成29年の挑戦目標は、
無[〃]を理解しようとした。

事の始りは、昨年平成28年、実は実母（86歳）の旅立ちを見送ったところ、相次いで母の兄弟、姉、弟、私の叔母、叔父にあたる方が実母の後を追うように2―3か月おきに他界した。普段お聞きする機会がない、真言宗の和尚さんの講話を聴いたのがきっかけとなった。

無[〃]とは関係がないが、実母が老衰で三途の川を渡るうとする数日前、仕事で大阪方面へ出かけたとき、予てから立ち寄ってみたかった真言宗の総本山高野山まで足を伸ばし参でて来たのだった。〃いない〃虫の知らせだろうか、実母が亡くなつて直ぐに母と同居している実兄から知らせがあった。

普段なにげなく神社やお寺に行くとお賽銭の代わりに願掛けをするが、ある和尚が願わず無心に祈ることが道だ[〃]というような話をされた。それをお聞きしてから、近くの巢鴨高岩寺（とげ抜き地藏）に出かけた際には本殿で賽銭を投げてから、偽りの無心[〃]に何回かはなつたが、特に悟りも未だ無く生活は変わつてはいない。

数学的[〃]無[〃]も表現、理解は難しい。まして心の無[〃]とは何ぞやとなつたわけである。

新年の初夢ではないが、平成29年、2017年の取り組みテーマは無の追求と以前2月のブログに述べた。

9月に入つて今年も秋を迎えようとしている。時を見つけては〃無[〃]を先ず数学的に表示すること等考えてきた。それは単なる数学的数字や記号のみの表現にとどまらず、社会的事象、人の中の思考や意識の持ちようといった事象で関連付けられるのかという試みでもある。

最近インドでNeoを意味する最初の文字を見出したというニュースがあった。それは紀元3世紀ごろのサンスクリット文字で、点だという。

我々日本人、日本文化は漢字の世界で長い間、醸されてきたので、漢字から逃れられないが、無（ム）の前に零（レイ）などの文字も思い浮かぶが、漢語辞典などではもともと、極めて少ない、小さいという意味をもっており、いつしか零（0）とも代用してきたようだ。

さて、無[〃]は漢語辞典に依ると、由来は（亡）+（森や木々）で、木々が亡くなった状態を言うそう。そうすると、亡という意味も合わせて考えようという次第になった。人間の心理として〃無や亡〃は、目の前に具体的に存在する物や事象を否定することで認知するように。漢語では無心、無意識、亡国、死亡等々数え切れない語句がある。

（注）平成28年の目標はAI人工知能で、開発・実用化を納得しようとする試みであった。

絹の話 (86)

「アトリエトレビ」 今 泉 雅 勝

「人の目と光と絹」

これまでの販売現場体験から得たもの

絹に長波長（赤く黄）の光（ハロゲン球等）を当てると女性が集まって来て売上も上がります。特に黄金色のムガシルクへの反応は顕著です。

しかし、それを見た女性が全員反応する訳ではありません。ほんの10位%です。この人達はムガシルクの艶に惚れ惚れした安堵感を顔の表情に現わします。

また、染織の失敗作を展示の隅に置くと、自分の求めていた色に巡り会えたと言って、頬ずりせんばかりの笑みを浮かべて買い求めて下さる人がいます。これらの行動は男性には無い女性特有の現象です。

これらの艶や色彩への感受性はどの様にして起こるのでしょうか。

光と絹の関係

シルクは当たった光の約80%が繊維の表面で反射され、20%位が繊維の中に入り、繊維の中で乱反射を繰り返して10%位が熱に、10%位が蛍光色を帯びた光に転換さ

れ、1本の細い繊維の中の10000本のフィブリル（9万本のミクロフィブリル）3億1千万本の縦に並んだアミノ酸結晶が束になった中を乱反射しながら玉虫効果を生じさせて、絹の艶となって目視されます。

野蚕絹のヤマユガ科の繊維は種類によって異なりますが、多孔質（エリ蚕40孔前後、ムガ蚕は約500）でアミノ酸組成も家蚕と異なり、それぞれ独特の反射光を見る事が出来ます。その中でもムガ蚕の艶が特異です。女性の目は男性より色識別範囲が「広くて深い」のはどうしてなのだろうか、目の構造を調べてみました。

人の目の進化

中生代の哺乳類は外敵に見つからないように体を小さくし、もっぱら夜間に活動しました。夜間では色はよく見えないし、見る必要ありませんでしたので、嗅覚を発達させましたが、色の識別は青い光と赤い光を見分けられる2色型色覚でした。

今日でもイヌ、ネコ、ウシ、ウマなどは2色型ですが、地球の大変動により恐竜などが絶滅し、昼間活動の脅威が減少して来ると哺乳類が昼間活動をするようになって、霊長類は正確に色を識別する必要に迫られ3色型色覚を獲得しました。

従って、人間は目の中に赤錐体、緑錐体、青錐体とい

う（色の3原色）、3つの錐体細胞を持つようになり、それぞれの錐体が色を感じ、脳へ信号を送る事で色覚を得るように進化しました。

一般的に1つの錐体細胞は濃淡約100種類の色を識別し、3錐体組み合わせると100万色を識別出来るようになりました（例えばオレンジ色が見るのは、緑錐体細胞から中程度、赤錐体細胞から強度の信号が送られた結果です）。

ところがこの錐体の認識感度は人種、性別、年齢、居住環境等もかわって人それぞれに僅差があるようですので、人それぞれ色の好みも違って来るわけです。殆どの人はこの範疇にはいりません。

しかし可視光線は多色で、3色の光線から構成されているわけではないようです。3色以外で紫外線領域の(330nm〜400nm)色が見える極少数の人がいることが判り、その人は4錐体保持者ではないかと思われるようになりました。（4錐体保持者は1億色を識別出来る）

例えば一般の人に黄色に見える色の一部に紫色が見えるというものです。この人達も程度の差があり、軽度の人も含めると全女性の12%にもなるという説もあります。

女性には赤錐体と緑錐体にあるオプシンと呼ばれる光

を吸収する分子の遺伝子がX染色体（2個）に存在し、赤錐体の遺伝子が突然変異を起こして4錐体めが出来ると考えられ、X染色体を1つしか持たない男性には生じないと言われています。

ムガシルクに反応する人は4錐体保持者か

デパートで展示してあるムガシルクの前を通る女性で、その艶に30%以上の人が何らかの反応をし、その中の10%位の人が強く反応します。さらに2%位の人が強烈な反応を示します。この人達の大部分の人は3錐体保持者であってもX染色体が少しく進化（異変）を起こしている人達と思われれます。強烈に反応する人こそ4錐体保持者と思われれます。

男性は数%の人が反応しますが、強烈な反応はありません。男性も3錐体を持っていますが、太古の2錐体の時代の色覚が影響しているようで、細かい色柄など見分ける能力に欠けていると思われれます。

ですから、今日でも男性はシンプルな白黒を中心にした衣服を好むのでしょうか。

女性が一生懸命お化粧や衣服の色柄に努力しても男性は女性の期待ほど感じていないようです。

楽しい時間 62

山本紀久雄

2017年11月30日

トカラ列島移住

東京から飛行機と船を乗り継いで約20時間。鹿児島県のトカラ列島にたどりつくまでには、海外旅行並みの移動に耐えなければならぬ。人口は全島合わせてわずか700人。

だが、コンビニも病院もないこの絶海の島々で、いま移住者が急増していて、なかでも宝島は、全国的に注目を浴びている。

そこで、トカラ列島と宝島の状況を確認しようと、今年で25回目開催となる離島フェア「アイランダー2017」に行ってみた。11月18日（土）、池袋サンシャイン。「アイランダー2017」は国土交通省が主催、ということとは国が地方活性化の観点から力を注いでいるということである。

トカラ列島のブースは、なかなか盛り上がりつつあった。だが、トカラ列島の名前を知る人は、そう多くはないだろう。トカラ列島は有人7島、無人5島からなり、ちょうど屋久島と奄美大島の間にそれらの島々が点在している。行政区は鹿児島県十島村に属し、人口は全島合わせてもわずか700人。最も大きな中之島でも、周囲は約32kmしかない。交通手段は週2便の「フェリーとしま」

のみ。最南端の宝島までは、13時間もの船旅だ。しかもトカラ列島は「台風銀座」の只中にあり、フェリーは頻繁に欠航してしまう。各島にはコンビニや飲食店、ガソリンスタンドはおろか信号もなく、小さな売店がひとつに郵便局、看護師のいる診療所があるだけ。住民のほとんどは農業、漁業、畜産業など第一産業に従事している。

こう聞くと、住民はどんなに不便な暮らしをしているのかと思ってしまうが、この絶海の島々に、いまなぜか日本各地から移住者が集まっているという。2015年の国勢調査では人口増加率が15・1%になり、何と全国2位になった。その成功を参考にしようと、県外からも視察団が訪れる。タイミングよく『クーリエ・ジャポン』が宝島を取り上げたので、これを参考に以下記したい。

宝島は周囲約13kmで、人口は140人ほど。サンゴ礁に囲まれた青い海と白い砂浜という日本らしからぬ光景が展開されている美しい島である。十島村役場・定住対策室によれば、十島村は2010年に移住者誘致を始めたという。これは全国的に見ても、かなり早いタイミングだった。きっかけは、村の人口が600人を割ったこと。十島村にはかつて8つの有人島があった。だが、そのうちのひとつの臥蛇島（がじゃじま）が人口減少のため1970年に閉島。住民13人は本土に移住を余儀なくされた。

島をひとつ失ったという喪失感は、村人の記憶に深く刻まれた。それゆえ、近年の過疎化・高齢化が進む状況にもいち早く危機感を感じ、積極的な移住者誘致に舵を

切ったのだという。まずは、役場内の組織を改変し、地域振興課・定住対策室を設立。一般の就職サイトや物件サイトにトカラ列島の情報はのっていない。そこで移住者が最も関心を寄せる就業と家探しの情報提供を、同部署で一手に引き受けることにしたのだ。

さらに移住者のための、手厚い支援制度も用意した。たとえば十島村の移住者が家族そろって第一次産業にいた場合、期間限定ではあるが1日あたり80000、1万円の支援金が支給される。経験のない移住者には、村のエキスパートによる指導も役場が斡旋してくれる。

2010年に始まった移住者誘致政策の後に、宝島の移住者第一号になったのが、45歳夫と39歳妻の夫婦。移居前、夫は東京で建設業の仕事をしていた。妻は4年の英国留学を経て、アパレルデザイナーの仕事に復帰したところだった。

2人とも、このままずっと東京暮らしを続けていくのだろうと漠然と想着いて、まさか自分たちが離島に移住するなんて、夢にも思わなかったという。だが、ある日突然タイミングがやってきたというから、人生はわからない。

結婚後、2人は東京の郊外に庭付きの一戸建てを借りた。畑を持ちたいという妻の希望を叶えるためだ。だが、毎日の通勤に1時間半以上もかかるせいで、帰宅するころにはぐったりと疲れ、畑どころではなかった。仕事に追われ、自分の時間が持てない日々にはフラストレーションを募らせていたところ、偶然に妻が見つけたのが十島

村の移住者募集の案内だった。宝島という名前に惹かれて下見に行くと、「思い描いていた島暮らしに近い世界が広がっていた」と移住を決意。

移住してしばらく経って、ふと頭に浮かんだのが、島の人に教えてもらった芭蕉布だった。芭蕉布は、イトバシヨウという植物の繊維でできた織物だ。シャリシャリとした涼しげな風合いと丈夫さが地元住民に愛されていたが、既製の服が島に入ってくるようになると、その伝統は途絶えてしまった。最後に作られたのは、約100年前だという。

だったら、この芭蕉布を復活させてみてはどうだろうか。そこで、2014年4月に地元住民を中心としたプロジェクトを始動させた。プロジェクトで留意したのは、「単に伝統を復活させるのではなく、いまの時代に合う新しい芭蕉布を作る」こと。知恵をめぐらせた結果、思いついたのは特産の島バナナを活用することだった。

近年、宝島では島バナナの出荷が増え、そのため果実をとった後の茎が大量に廃棄処分されるようになっていた。そこで、イトバシヨウの代わりに島バナナの茎から繊維を抽出することにした。ゴミを再利用すれば環境にも優しく、その分コストも抑えられるからだ。

現代的な技術と発想で伝統産業を復活させたこの取り組みは、さまざまなメディアに取り上げられ、全国的にも注目を浴びた。この「芭蕉布効果」のおかげで、宝島への移住人気はトカラ列島のなかでも群を抜いている。船酔い覚悟でいずれ宝島へ、と思っているところ。

漢詩研修 (十四)

千代田岳精会 平井茂行

汪倫^{おうりん}に贈^{おく}る

李^り

白^{はく}

李白^{りはく}舟^{ふね}乗^{のり}て将^{まさ}に行^ゆくを欲^{ほつ}す

忽^{たちま}ち聞^きく岸^{がん}上^{じやう}踏^{とう}歌^かの声^{こゑ}

桃^{とう}花^か潭^{たん}水^{すい}深^{ふか}さ千^{せん}尺^{じやく}

及^{およ}ばず汪倫^{おうりん}が我^{われ}を送^{おく}る情^{じやう}

李白^{りはく}乗^{のり}舟^{ふね}将^{まさ}に欲^{ほつ}行^ゆ

忽^{たちま}ち聞^きく岸^{がん}上^{じやう}踏^{とう}歌^かの聲^{こゑ}

桃^{とう}花^か潭^{たん}水^{すい}深^{ふか}さ千^{せん}尺^{じやく}

不^ふ及^{じやく}汪倫^{おうりん}送^{おく}る我^{われ}情^{じやう}

棹^{さう}させどそこひも

知^しらぬわが心^{こゝろ}も君^{きみ}に見^みえりかな

【作者】李白（七〇一―七六二）盛唐の詩人。字は太白^{だいはく}。四川省の人。西城で生まれ、五歳の頃、蜀に移って来たと

もいわれる。若い頃から才を現し、任侠の徒と交わり二十五歳の頃、蜀を出て長江流域を遊歴、その頃孟浩然らと交わった。四十二歳の時、長安に出て玄宗宮廷詩人として活躍した。一面豪放で、逸脱した振る舞いが多く、宮廷人の恨みをかい当時の実力者高力士の讒言に遇い宮中を追放された。以後再び仕官することは無かった。その後各地を放浪し杜甫、高適らと交わった。その後長江を下り、各地を放浪、六十二歳で没した。李白は生涯酒を愛し、その死について、川に舟を浮かべ泥酔し、水中に映った月を捉えようとして、溺れ死んだという伝説も残っている。その生涯は、長安の一時期を除いて放浪の生活であり、その詩は自由奔放、天馬空を行くが如しで、特に絶句に優れ、杜甫の「詩聖」に対し「詩仙」と言われ。現在一二〇〇余首が残っている。

【語訳】○汪倫：安徽省桃花潭の村人。○踏歌：手を繋ぎ、肩を組み足を踏みならして拍子をとる歌。

【通釈】私は舟に乗っていいよ出発しようとしている時、川岸の上から、足を踏みならして調子をとる別れの合唱が聞こえてきた。この桃花潭の水の深さは千尺程もあるうと思われるのに、その水の深さも、別れを惜しんでくれる王倫君の情の深さには、とても及ばないであろう。

【参考】この詩は七五五年、李白五十五歳の作である。この詩の前に「秋浦の歌」十七首がある。四十四歳の時、玄宗から翰林供奉を免ぜられ、放浪の旅にでてほぼ十年後である。この前年安禄山が背き、洛陽が陥落した。李白はこの頃から、秋浦から宣城を中心に動いていた。この年の作に、「晁卿衡を哭す」「独り敬亭山に座す」などがある。

「歴代天皇御製歌」(八十四)

貫名海屋資料館

「明治天皇」③

(明治三十四年・一九〇一年 五十歳)

北清事変起り、北京に派兵。

梅雨 すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりてさみだれのふる

(明治三十五年・一九〇二年 五十一歳)

日英同盟調印。青森歩兵、八甲田山中で多数凍死。

述懐 暁のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかがあらむと

湊川懷古 あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

寄道祝 千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代^{よつよ}までに

(明治三十六年・一九〇三年 五十二歳)

旅 まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな

詞 こののはの道のおくまでふみわけむ政まつりごときくいとまいとまに

思往事 をりをりにおもいぞいづる國のため心くだきし人のむかしを

をりにふれたる

天てらす神のみいつを仰ぐかなひらけゆく世にあふにつけても

(明治三十七年・一九〇四年 五十三歳)

橘 二月 露国に戦を宣す

たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橘のかげをふみつつ

をりにふれたる

しぐれして寒き朝かな軍人いくさびとすすむ山路は雪やふるらむ

いたでおふ人のみとりもころせよにはかに風の寒くなりぬる

土偶(2)

夏目勝弘

縄文大国の山梨県笛吹市と甲州市に、またがる釈迦堂遺跡群(範囲二万五千平方メートル) 住居跡総数二四九基。

出土した土偶は、ほとんどが壊わされていた。土偶の数は二六個、全身で見つかったもの二個、顔のみが二八〇個、その他両脚があるもの、腕のみのもの、胴だけのものとさまざまな形で見つかった。

なかには二三〇メートルも離れた場所で見つかったものに、接合した土偶もある。

一万五千年余という、想像もつかない長期間つづいた、縄文文化その縄文人の生活した土地で生まれ現在に至っている。

顔つきも体つきも似て、小柄であり、なんとなく近親感を特に覚える。

人形土偶は、ほとんどが女性であり、そして縄文草創期に作られた土偶は、今までに三体が見つかつてをり、それも女性の土偶。

一万五千年余も続いてきたのは、人口もそれなりの数が必要であり、他民族に亡ぼされることなく、寿命も五十歳ぐらいまでの寿命が必要だと思ふ。

世帯人数は五人から六人ぐらいだと想像されている。自然環境も大きく影響される。

縄文時代の気候は、地球全体の温暖化によつて、森が豊かになり、木の実やイノシシ・シカまたは小動物が増え、植物資源も豊かな時代が続いていた。これらのことは貝塚からの出土物品から想像できる。出土する土偶が女性ばかりで、それも妊婦が多いというのも、

子供を多く生み、成人させなくてはならない。

男性の出土品は土偶ではなく「石棒」と人面付石製品、石棒は男性のシンボルを象った祈りの道具。

人面付石製品は、男性のシンボル「男根」の根本に、ギリシヤ風イケメンを断面に彫つたものである。

これらの出土品は、ストーンサークルの中心に立て、冬至・夏至・春分・秋分・満月・新月等、自然の霊的存在を感じるときの祀にささげ、お祈をしたと思われる。

このことから子供への思いを強く感じられてしかたがない。

土偶の特徴は、妊娠状態のお腹にできる正中線、お腹の膨らみ、性器が表現されている。

なかには出産の瞬間の子供の頭部が見える土偶も出土している。一番恐れていたことは、子供の死亡であり、その埋葬方法である。

竪穴住居の母親が常に座っている下に、甕棺に入れて埋葬する方法と、竪穴住居の出口の近くに甕棺に入れ埋葬してあることが多い。

縄文時代も、男性が女性の家に通ってくる通い婚だったという説もある。

万葉集にも人麻呂が、穴師の里の妻の所に通い一夜を共にした時の歌(ぬばたまの夜のさり来れば巻向の川音高しも嵐かも疾き)

縄文の住居も川の近くなことが多かったであろう。

天照大神の神代の時も女系時代であり、日本が発展してきた。

現代の日本の社会は社会では一般的には男性中心のように思えるが、家庭では強女系社会で平穏であるの思いがする。

(参考文献 豊田亜紀子著、土偶のリアル・山川出版社 知られざる縄文ライフ・誠文堂新光社)

「氷魚」のことから (204) 岡本八千代

いよいよ新年。西暦2018年。明治150年。平成は30年の節目となる。つくづくと来し方を思い、まだ少しは残っているらしい行く末のある私なのだ。これこそ自然法爾といふことかもしれない。

最近。「書にとって美とはなにか」(中国・日本の書論における書芸術の本質) という論文調の本が、著者古川玄朗先生から贈ってきた。

その中に「書は本来に人に感動を与えることができる芸術といえるのであろうか」という問いに対して、私の心に残ったのは、空海(弘法大師)論であった。

1、書は心を万物に散じて、万物の形を字勢に託すことが大切。

2、筆法が自然の理にかなえば書は健全な生命力を発揮することができる。

3、形臨ではなく、意臨によって、自己の個性を表現すべきである。

4、書には異質なものを調和させる働きや自然界を運行させる造化の理がある。

5、書は技芸の修練とともに雅趣を求める。

以上のことからして、人の心の感性が大切かと思った。そしてそれは自己の抒情性へとつながってゆく。短歌創作も抒情の心の動きが大切になってゆくのであろう。その中に美が生まれてくるのか？

カズオ・イシグロ氏(文学ノーベル賞作家)は。「もののあはれは小説を書く上で、常に私の心の中にある」と語っていた。「もののあはれ」は、辞書には、

①なんとなくあわれなこと。

②しみじみとした情趣

③客観と主観とが調和するとき生じる美的理念と、あった。さて、私の心に浮かんでくるのはどんな「もののあわれ」であろうか？

正岡子規、夏目漱石もそれぞれの「もののあわれ」の心の持ち主であったからこそ、男同志の友情も続いたのであろう。そして、二人共々文学の方向に傾いていったのであろう。

英国で「ロンドン漱石記念館」を個人で運営しておられた、恒松郁生氏(漱石研究家)は、生誕150年を機に記念館に「幕を下ろす」と中日新聞に載っていた。もう去年になってしまふけれど、もう閉じられたかもしれない。恒松氏は、1984年8月、漱石が留学中に最も長く住んだロンドンの下宿の向かいにあるアパートの部屋を私費で取得され、開館されたのであった。そこで飾られていた物は、街の写真や漱石の名前が記された国勢調査資料のコピー、留学中に買ったものと同じ書籍などを展示。

漱石が国費留学生として英国に滞在したのは1900年(明治33年)から約2年間。30代だった漱石は、当時の日々を「もつとも不愉快の二年」と書き残し、帰国後に「坊ちゃん」などの代表作を発表し、大作家となった。

一方、記念館運営をやめて、大学の先生にもどられた恒松先生のその後は今の私にはわからない。

磯辺 耐

みなさまへ⑤

明日はいよいよ初日に注文した
チューブが届く日です。同室のみなさん
おひとりずつレクチャーしました。



みなさん、今日もがんばって下さいね!!

みなさまへ⑥

(あたたかいお手紙、ありがとうございます。
元気100倍です!!)

流れてくても
流れた気になる
シャンプー

期間限定
パンラアイス

本気の
体をぶくやつ



うう...
おなまからのお手紙
まりえコーチとえりこコーチも、リクエストを
正確に守ってくれたお見舞の品、ありがとうございました...
休後1日目ですが、5日目ぐらいの行程に入っています。
いけませんね。ゆっくりします。

編集室だより【二〇一七年十一月】

○「釈迦如来坐像」彫り進んでいる。そして今は唐草光背を彫っている。お釈迦様の「三界のあらゆるところまで届くという光りを象徴する」光背なのだから、自分の心にしつかり心する。

○清澄庭園へ吟行。大好きな、この貴重な庭園の、園内から外れ出てしまうほどの片隅に、これ以上のやさしさはない笑顔でおられる小さな御姿お地藏様に直行する。私を救済して下さっています。

○東京国立博物館。平成館。運慶展。

学生時代、先生が引率して下さる授業で、京都、奈良に長く滞在して居たことがあった。興福寺、無著菩薩立像、世親菩薩立像…。歴史と、造形としての頭部から衣、爪先まで…細やかに教えを受け、感動のかたまりみたいになつて外に出ると、鹿達が寄つてきて、おせんべいをあげたのだった。

その時の仏様達が、東京にいらして下さっているのです。いまオーラに包まれている心地。

○沢山になってしまった「物」に囲まれて…仕舞い込んであった物…使わないままゴミになってしまふのはいやだ…絹の光沢、金の輝き、まばゆいサリーを探しだした…寝

室のカーテンにしてみた…毎夜寝るのがうれしくてたまらなくなつた。

○隋の時代。玄奘三蔵・三蔵法師は、瑜伽師地論と唯識論の奥義をきわめるため、国禁を犯し、草木も水もなく、灼熱のタクラマカン砂漠を歩き、雪と氷の天山山脈を越え、三年かけてインドに辿り着いた。ナランダー寺院において唯識教学を学び、インド各地の仏跡を訪ね、帰路も辛苦を重ね、仏像、仏舍利、サンスクリット、梵語の仏経原典を携え、645年に長安に帰られた。

日本では、中大兄皇子、大化の改新の年、玄奘は帰国後、持ち帰った仏典の翻訳、大般若経600巻はじめ数々の翻訳に生涯をかけた。唯識楽の研究と伝導は、弟子の慈恩大師に任せた。

804年、最澄、空海…遣唐使は唐に渡り、長安で仏典の翻訳に従事し、仏典、密教を日本に持ち帰る。嵯峨天皇の後押しを得た。日本の「般若心経」の基となり、真言密教は全国各地に伝えられた。

おぼろに思えがいていたことを、漢詩吟に出逢えたことで、筋道たててなくなつてしまった。

○古へも今もかはらぬ世の中に心の種をのこす言葉 ことのは 細川幽斎

古今伝授と、解釈も守り伝えるということだけれど、言葉のまま、リズムのまま、それぞれが感じれば良い世の中になり、この和歌が残されたことを、ありがたく思う。

野菜の花（19）

鈴木 孝 雄



○ サニーレタス

サニーレタス収穫は、下の葉から上に向かって徐々に摘んで行く。春も終わる頃、中心の茎が急に伸び、葉が小さくなれば収穫終了。写真撮影のため置いておいたら、7月16日こんな可愛い黄花が咲いた。70cm位まで伸びた草形はキク科のヒメジョオンに似ている。切り花にも使えそうだが、花持ちが悪く午前中で萎れてしまう。

今では葉レタスの人気品種、サニーレタス。生い立ちをご存知ですか？昭和40年代、豊橋南部農協の朝倉昭吉氏が、玉レタスに代わる葉レタスの需要が将来高まると考え、米国からPrizehead Leaf Lettuceを導入改良し、昭和46年初めて東京に出荷した。サニーレタスは出荷当初レッドレタスと言う名だったが、語呂が良くないとの

江上トミ氏のアドバイスで、サニーレタスに改名された由。朝倉氏の優れたところは当時の農協とは思えず、発想が市場指向な点。包装具も考案したそう。登録商標は使用制限せず、そのためサニーレタスは全国に普及。お陰で私も家庭菜園から、美味で見た目も食欲をそそるサラダ用レタスを味わうことが出来る。赤紫な葉から想像出来るように、 β カロチンが玉レタスの10倍以上で、栄養価にも優れている。

サニーレタスの栽培は難しくない。気を付けることは、好光性種子なので種まきの覆土はごく薄くすること。アブラムシは避けられない。牛乳を塗る、木酢液を噴霧する、水で流すなど色々試みたが、手で潰すのが最善。

皆さんも豊橋ゆかりのサニーレタスを栽培してみても如何でしょうか？

今回はインゲンマメの花の予定です。

お知らせ

△二月号の原稿は、十二月三十日（土）までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。
郵便の休配（日曜、祝日）を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月
の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アラギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰（20字×10行）を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

「三河アラギ」について

◇三河アラギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。
振替口座〇〇八三〇一六一五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アラギ発行所・〒一一四一〇〇二二
東京都北区王子本町一―二六―六A
TEL・（〇三）五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美